



幼少期の基本的な生活習慣の習得状況に 関する実証研究:社会関係資本の視点から

益山 未奈子

Sociology and Education

Department of Education Policy and Social Analysis
Teachers College, Columbia University

<付記>

東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブより、「第3回子育て生活基本調査(幼児版), 2008」(ベネッセ教育総合研究所)の個票データの提供を受けました。

構成

1 目的と背景

2 分析方法

3 分析結果

4 考察

1

目的と背景

目的

目的

- 本研究は、幼少期における家庭の社会関係資本と子どもの基本的生活習慣の習得状況の関係を明らかにするものである。

問題の所在

- 近年、子どもの基本的生活習慣の乱れが指摘されている。
- 基本的生活習慣の乱れは、学習意欲や体力、気力の低下につながる。

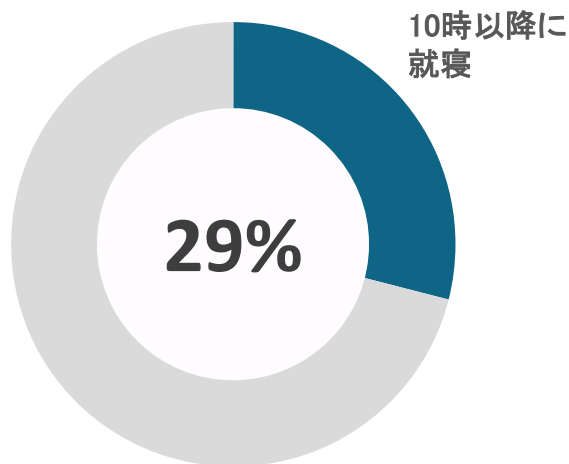
キーワード

- 社会関係資本, 基本的生活習慣

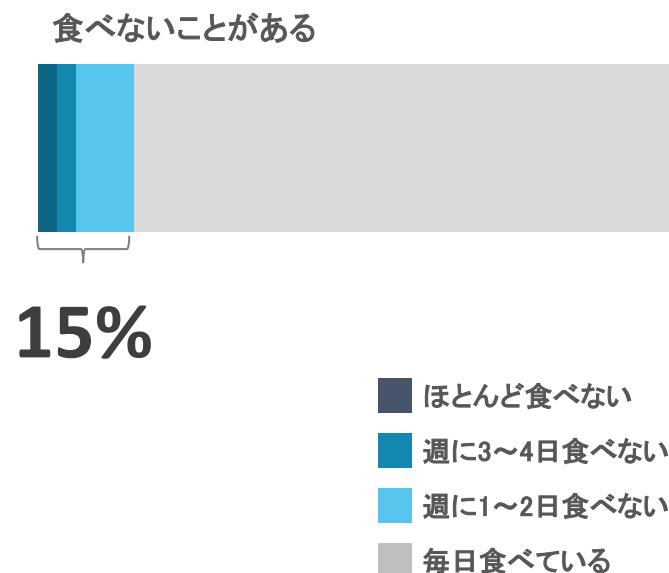
背景： 基本的な生活習慣の乱れ

近年、子どもの基本的な生活習慣の乱れが指摘されている。とくに、幼少期における子どもの食事や睡眠などの乱れが報告されている。

就学前の幼児の就寝時間



朝食を食べないことがある小学生

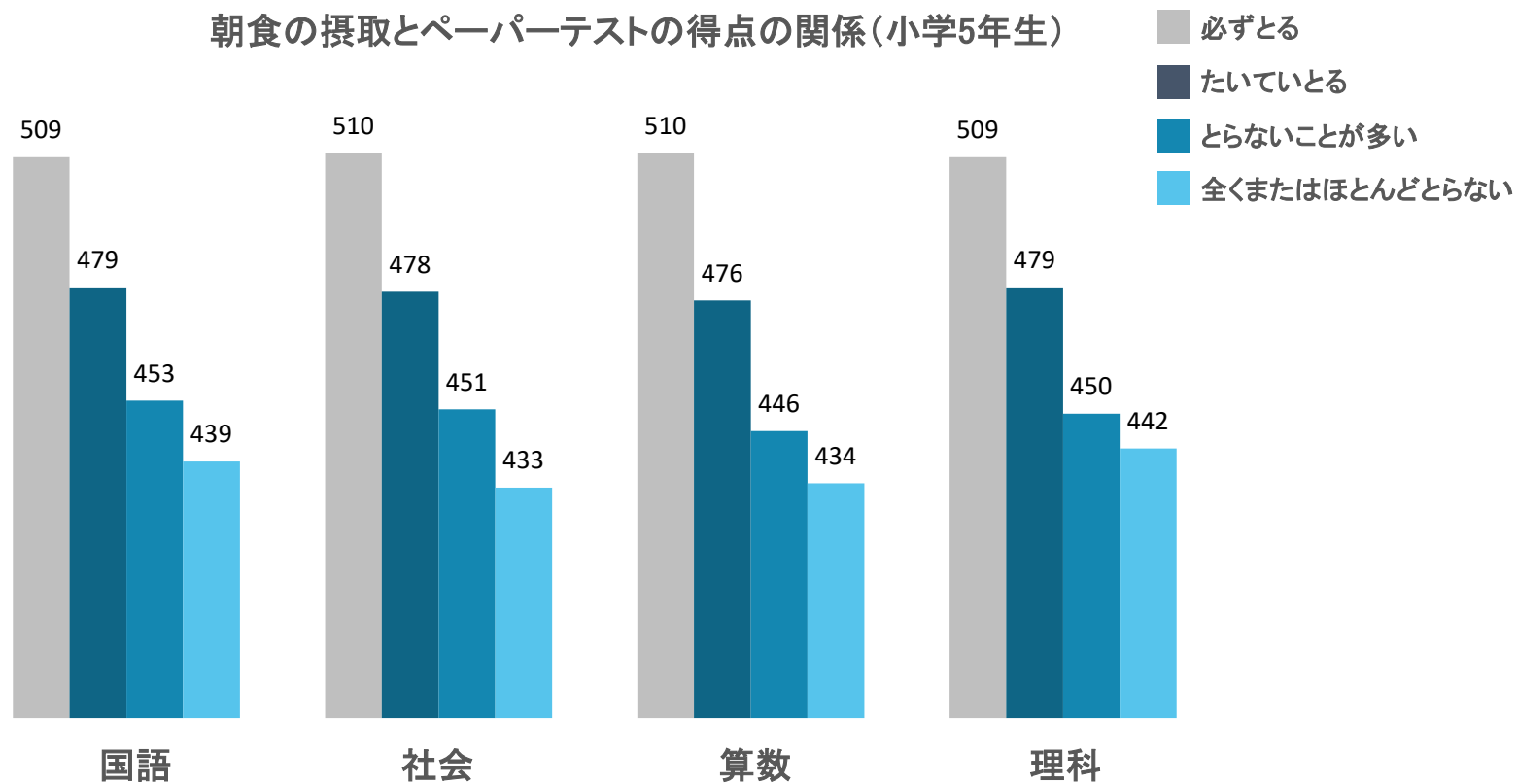


出典：（左図）ベネッセ教育研究開発センター（2005）「第3回幼児の生活アンケート」

（右図）文部科学省（2005）「義務教育に関する意識調査」

背景： 基本的な生活習慣と学力の関係

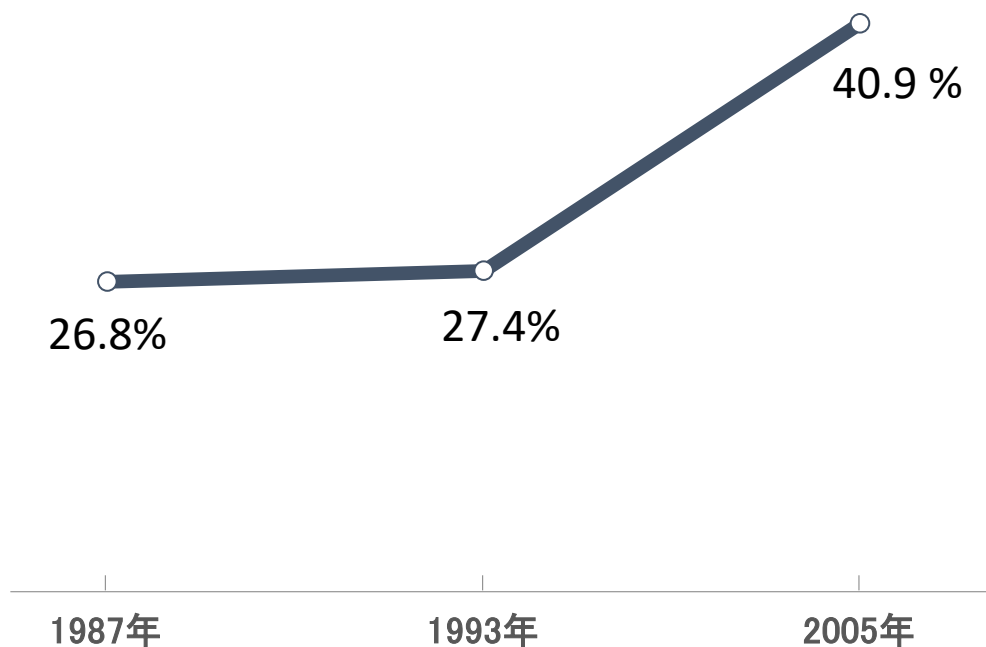
国立教育政策研究所の調査によると、毎日朝食をとる子どもほど、ペーパーテストの得点が高い傾向にあることが報告されている。



背景：朝食を子どもだけで食べる割合

厚生労働省の調査では、朝食を子どもだけで食べる割合が、1987年から2005年の17年間の間で、約15%増加している。

朝食を子どもだけで食べる比率の推移
(小学1～3年生)



理論的関心： 社会関係資本

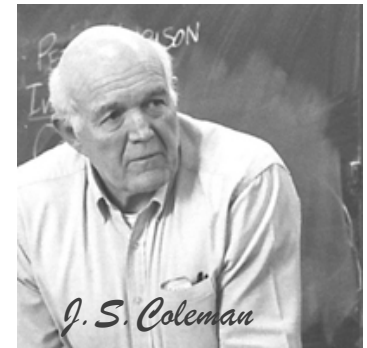
教育基本法第10条には、子どもの教育は保護者が第一義的責任を負うと明記されている。幼少期においては、とくに家庭における保護者の養育が子どもの教育にとって重要な役割を果たす。子どもの基本的生活習慣の習得につながる保護者の教育・しつけは、まさに保護者と子の関係性(=社会関係資本)に基づき行われるものである。

社会関係資本 とは

- 社会構造という側面を備えている
- 個人であれ、団体という行為者であれ、その構造内における行為者の何らかの行為を促進する

社会関係資本 の形態

- 恩義と期待
- 情報チャンネル
- 社会規範



理論的関心： 家庭内の社会関係資本

コールマンは、社会関係資本が高いほど子どもの中退率が低いことを実証している。その際、家庭内の社会関係資本が高い条件として下記の5つを提示している。

家庭内の社会関係資本が高い条件



コールマンの置いている仮定

- ①両親が揃っている場合には、他のすべての条件が等しければ、ひとり親の場合よりも親子関係は強くなる
- ②子ども一人ひとりへの両親の注目や関心は、おおまかに子どもの数に半比例する。したがって、家族の中の兄弟が多いほど、それぞれの子どもが利用可能な社会関係資本は少なくなる
- ③親子で個人的な事柄について会話をしているならば、それは親から子どもへの注目や関心が大きいことを物語っている
- ④子どもの就学前に母親が家庭外で働くと、形成期に子どもと一緒に過ごす時間が減るので、母子関係の強さを減じることになる。また、それは母親の注意が仕事におかれ、子どもからの注意が離れていることも反映しているかもしれない
- ⑤他の条件が等しければ、自分の子どもの大学進学に関心がある親は、そうでない親よりも自分の子どもにより多くの関心を持ち、子どもの将来に気を配っている

(参考) 家庭内の社会関係資本と中退率

コールマンは、下記の通り、家庭内の社会関係資本が高いと、そうでない場合と比べて中退率が低くなることを実証している。

家庭内の社会関係資本		中退率 (%)	中退率差 (%)
両親の存在	両親 ひとり親	13.1 19.1	6.0
家庭内の他の子ども	兄弟姉妹が1人 兄弟姉妹が4人	10.8 17.2	6.4
親と子の比率	両親と1人の兄弟姉妹 片親と4人の兄弟姉妹	10.1 22.6	12.5
子どもの教育への母親の期待	大学進学を期待 大学進学を期待しない	11.6 20.2	8.6
測定量の組み合わせ	両親・兄弟姉妹が1人・大学進学を期待 片親・兄弟姉妹が4人・大学進学を期待しない	8.1 30.6	22.5

2 分析方法

データ

本研究では、ベネッセ教育総合研究所の「第3回子育て生活基本調査幼児版 2008年」の調査データを使用する。幼少期の子どもを持つ保護者への大規模調査であり、社会関係資本及び基本的な生活習慣の指標が網羅的に設定されており、本研究の趣旨に合致する。本研究は、SSJDAより提供を受けた母親サンプルを利用する。

調査テーマ

幼稚園児・保育園児をもつ家庭での子育ての実態及びしつけや教育に関する保護者の意識を捉える

調査方法

幼稚園・保育園通しによる家庭での自記式質問紙調査

調査時期

2008年9月～10月

調査対象

首都圏、地方市部、地方郡部の幼稚園児・保育園児をもつ保護者
6,131名（配布数8,238通、回収率74.4%）

二次データ

東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブより個票データの提供を受けている

利用可能なデータ

本研究で利用可能なデータは、SSJDAから提供を受けた母親サンプル5,884名のみ（首都圏3,069名、地方市部1,743名、地方郡部1,072名）

指標① 基本的な生活習慣(被説明変数)

被説明変数である「基本的な生活習慣」の習得状況については、以下の指標を使用する。

Question: 「お子様は、次のようなことを自分1人でできますか。」
「1.まったく1人ではできない」「2.あまり1人ではできない」
「3.だいたい1人でできる」「4.完全に1人でできる」の4件法の回答
(※ただし、調査項目の回答は反転している。)



決まった時間に
朝起きたり
夜寝たりする



家族やまわりの
人にあいさつや
お礼を言う



トイレでの排泄や
その後始末



食事をこぼさず
行儀よく食べる



歯磨きの習慣



お風呂での
からだ洗い



翌日のしたくや
準備をする



衣服を脱いだり
着たりする

指標② 社会関係資本(説明変数)

説明変数である「社会関係資本」は、コールマンの研究を参考に、以下の指標を設定する。

1

世帯に両親が揃っている→「父親と同居」

配偶者との関係性(子育てに協力的か等)を尋ねた3つの質問のうちいずれかで「配偶者と一緒に暮らしていない」を選択した場合「1」、それ以外は「0」のダミー変数を作成*

2

兄弟の数が少ない→「ひとりっ子」

「子ども全員の人数」についての回答につき、ひとりっ子の場合は「1」、それ以外は「0」としてダミー変数を作成

3

親子間の個人的な事柄についての会話がが多い→「会話」、「出来事を聞く」

「(家庭で)子どもと一緒に話をする」「(家庭で)子どもに一日の出来事を聞く」行為についての頻度を尋ねる質問のうち、「1.ほとんどない」、「2.月に1~3日」、「3.週に1~2日」、「4.週に3~4日」、「5.ほとんど毎日」の回答に基づき順序変数を作成

4

子どもの就学前に母親が働いていない→「専業主婦」

母親の現在の職業が「専業主婦」の場合は「1」、「パートやフリー(在宅ワークも含む)」、「常勤(フルタイム)」の場合は「0」のダミー変数を作成

5

子どもの大学進学への親の関心がある→「教育アスピレーション」

「子どもをどの学校段階まで進学させたいか」の質問に対して、「四年制大学」、「大学院」と回答した場合は「1」、それ以外は「0」のダミー変数を作成

*ただしこの設問からは、単身赴任等で配偶者と一緒に暮らしていない場合等も含まれている可能性があることに留意が必要である。

指標③ 保護者の社会経済的地位(統制変数)

統制変数である「社会関係資本」は、コールマンの研究を参考に以下の指標を設定する。



母親・父親学歴

父親・母親の最終学歴が高等学校の場合は「1」、専門学校・各種学校・短期大学は「2」、大学・大学院の場合は「3」を割り当てた



経済的なゆとり

家庭の経済的ゆとりについて「ゆとりがない」は「1」、「あまりゆとりがない」は「2」、「多少ゆとりがある」は「3」、「ゆとりがある」は「4」を割り当てた



父親職業

父親の現在の職業については、「技能労働」および「一般作業」をレファレンスカテゴリーとして、「上層ホワイト」ダミー(「専門職」および「管理職」)、「下層ホワイト」ダミー(「事務職」および「販売職・サービス職」)、「農林漁業」,「自営+農林業」ダミー(「農林漁業以外の自営業」の場合)のダミー変数を作成

指標④ その他(統制変数)

その他の統制変数として下記の指標を設定する。



核家族

家族構成が核家族の場合は「1」を、それ以外の場合は「0」のダミー変数を作成



地方市部

住居が都市部の場合「0」、地方市部の場合は「1」とするダミー変数を作成



母親・父親年齢

母親・父親の年齢は、29歳までを「20代」、30～39歳までを「30代」、40歳以上を「40代」としてカテゴリカル変数を作成



地方郡部

住居が都市部の場合「0」、地方郡部の場合は「1」とするダミー変数を作成



性別

子どもの性別について、男の子の場合「1」、女の子の場合は「0」のダミー変数を作成

分析モデル: 順序プロビットモデル

基本的な生活習慣に関する質問項目の回答は、下記に示す順序尺度となっている。ただし、調査票の回答項目は反転している。

1. まったく一人ではできない
2. あまり一人ではできない
3. だいたい一人でできる
4. 完全に一人でできる

したがって、被説明変数に連続変数を前提とする最小二乗法による回帰分析は適切ではなく、被説明変数に順序尺度を前提とする順序プロビットモデルを用いた。

推定は、TIBCO Spotfire S+® 8.2J for Windowsを用い、MASS ライブラリにある `polr()` 関数を利用した。

3 分析結果

記述統計量

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値
起床時間	3336	2.5213	0.8030	1	4
挨拶	3336	2.8996	0.6356	1	4
トイレ	3336	3.3219	0.6835	1	4
食事	3336	2.9505	0.6183	1	4
歯磨き	3336	2.8957	0.7046	1	4
お風呂	3336	2.7932	0.7723	1	4
翌日の準備	3336	2.2914	0.8324	1	4
衣服の着脱	3336	3.5701	0.5825	1	4
父親と同居	3336	0.0063	0.0791	0	1
一人っ子	3336	0.1568	0.3636	0	1
会話	3336	4.9472	0.2963	1	5
出来事を聞く	3336	4.8363	0.4776	1	5
教育アスピレーション	3336	0.6028	0.4894	0	1
母親_学歴	3336	1.8618	0.7071	1	3
父親_学歴	3336	2.0851	0.8971	1	3
経済的なゆとり	3336	2.3390	0.8025	1	4
専業主婦	3336	0.5665	0.4956	0	1
父親_上層ホワイト	3336	0.2644	0.4411	0	1
父親_下層ホワイト	3336	0.3765	0.4846	0	1
父親_自営+農林業	3336	0.0540	0.2260	0	1
核家族	3336	0.2071	0.4053	0	1
母親_年齢	3336	2.0525	0.5048	1	3
父親_年齢	3336	2.2293	0.5589	1	3
性別	3336	0.5342	0.4989	0	1
長子	3336	0.5081	0.5000	0	1
地方市部	3336	0.3013	0.4589	0	1
地方群部	3336	0.1619	0.3684	0	1

順序プロビットモデルの推定結果(N=3336)

	起床時間	挨拶	トイレ	食事	歯磨き	お風呂	翌日の準備	衣服の着脱
父親と同居	-0.1924	0.0840	0.2349	-0.1018	-0.2147	-0.2544	0.1607	-0.2553
一人っ子	-0.3286*	-0.0777	-0.4792*	-0.3432*	-0.3800*	-0.3006*	-0.2632*	-0.4394*
会話	-0.0436	0.1904*	0.0890	0.1558*	0.1979*	0.1412*	0.0430	0.1799*
出来事を聞く	0.1714*	0.1935*	0.0273	0.0821	0.1243*	0.0689	0.2368*	0.0024
専業主婦	0.1260*	-0.0111	0.0843*	-0.0403	0.0283	-0.0393	0.0706	-0.0761
教育アスピレーション	-0.0103	0.0744	0.0093	0.0104	-0.0088	-0.0746	-0.0890	0.0498
母親_学歴	-0.0066	-0.0203	-0.0310	-0.0400	-0.0814*	-0.0461	-0.0228	-0.1023*
父親_学歴	0.0280	-0.0369	0.0606*	-0.0126	0.0075	-0.0481	-0.0092	0.0434
経済的なゆとり	0.0637*	0.0458	-0.0179	0.0643*	0.0195	-0.0043	-0.0174	-0.0022
父親_上層ホワイト	0.0553	0.0525	-0.0290	0.1018	0.0943	0.0870	0.2075*	0.0656
父親_下層ホワイト	-0.0297	0.0092	-0.0486	0.0689	0.0222	0.0843	0.1101*	-0.0186
父親_自営+農林業	0.0033	0.1193	0.0319	0.1587	0.0646	0.1863*	0.1755*	0.1381
核家族	-0.0475	0.0989*	-0.0428	0.0082	-0.0375	0.0268	-0.0597	-0.0626
母親_年齢	-0.0189	0.0013	-0.1698*	-0.0745	-0.0274	-0.1918*	-0.1180*	-0.1019*
父親_年齢	0.0313	-0.0382	0.0456	-0.0065	-0.0009	0.0586	0.0335	0.0089
性別	0.0574	-0.0103	-0.4084*	-0.3210*	-0.2690*	-0.2051*	-0.3346*	-0.2597*
長子	-0.0673	0.0154	0.1013*	0.0062	0.0673	0.0132	-0.1432*	0.0499
地方市部	0.0140	0.0407	0.0081	0.0113	0.0558	0.0424	0.0407	0.0575
地方群部	-0.0265	-0.0457	0.0170	0.0114	0.1057	0.0806	-0.0616	0.0529
Deviance	7816.5780	6364.0220	6379.9010	6100.1930	6933.5090	7525.9000	7885.2120	5277.9370
AIC	7860.5780	6408.0220	6423.9010	6144.1930	6977.5090	7569.9000	7929.2120	5321.9370

注:表中の値はパラメータの推定値である。なお閾値の推定値は紙幅の関係から省略している。* p<0.05

分析結果のまとめ

① 世帯に両親が揃っている

- 世帯に両親が揃っていることが、子どもの基本的な生活習慣の習得状況に与える影響は確認されなかった。ただし本指標は、データの制約上、父親と同居していないことが、単身赴任の事情によるものなのか、離婚や死別によるものなのかの識別はできていない点に留意が必要である。

② 兄弟の数が少ない

- ひとりっ子であるほど保護者の関心が子どもにより多く向けられるため、子どもの基本的な生活習慣の習得状況は高い、という仮説とは反対の結果となった。ひとりっ子であるほど、早寝早起きやトイレ、食事、歯磨き、お風呂、翌日の準備、衣服の着脱に関する生活習慣が、兄弟姉妹のいる子どもに比べて身につけていないことが明らかとなった。

分析結果のまとめcont.

3 親子間の個人的な事柄についての会話がが多い

- 親子間での会話の機会が多いほど、早寝早起き、あいさつ、歯磨き、翌日の準備に関する生活習慣が身についており、また食事やお風呂、衣服の着脱の習慣もより習得できていることが明らかとなった。

4 子どもの就学前に母親が働いていない

- 子どもの就学前に母親が働いていない(=専業主婦)場合、母親が有職の場合と比べて子どもが早寝早起きの生活習慣を身につけていることが明らかになった。その一方で、他の生活習慣に与える影響については、統計的に有意ではなかった。

5 子どもの大学進学への親の関心がある

- 子どもの大学進学を希望する保護者の場合、そうでない場合とくらべて、子どもの翌日の準備に関する習慣が身につけていることが明らかになった。一方、他の生活習慣に与える影響については、統計的に有意ではなかった。

4 考察

考察

- 今回、コールマンの家庭内における社会関係資本に関する5つの指標を使用し、幼少期の子どもの基本的生活習慣との関係を実証した。
- その結果、母親が子どもと一緒に話をする、子どもに一日の出来事を聞く頻度が高いほど、子どもが早寝早起き、あいさつ、歯磨き、翌日の準備、食事、お風呂、衣服の着脱といったことに関する生活習慣を身につけられていることが明らかとなった。
- 一方、コールマンが指摘した「両親が揃っている」、「母親が働いていない」、「子どもの大学進学への関心がある」といった家庭内社会関係資本が高い条件については、幼少期の基本的生活習慣の習得状況にはほとんど影響を及ぼさなかった。
- さらに、「ひとりっ子であるほど保護者の関心が子に向けられる」という仮定のもとで、コールマンは兄弟数が少ないことを家庭内の社会関係資本が高いことの一条件としていたが、今回の分析からは、ひとりっ子であるほど基本的生活習慣が身につけていないことが明らかとなった。
- このことは、兄弟がいることによって、他の兄弟から基本的な生活習慣の習得の仕方を学ぶ、まねる、教わるといった機会があることにより、ひとりっ子であることが生活習慣の習得にマイナスの影響を及ぼしている可能性が考えられる。

知見のまとめ

1. コールマンの指摘する家庭内の社会関係資本が高い条件のうち、家族構造（両親がそろっている、兄弟がいない）や就業形態（母親が働いていない）といった形態は、子どもの幼少期の基本的な生活習慣の習得状況にはほとんど影響を及ぼさない。
2. 一方、子どもへの関心や注目の高さが実際の行動となって現れるような「子どもと一緒に話をする」、「子どもに一日の出来事を聞く」といった行為を行う頻度が高いと、早寝早起き、あいさつ、歯磨き、翌日の準備、食事、お風呂、衣服の着脱といった基本的な生活習慣が身についているということが明らかになった。
3. 以上から、家庭における幼少期の生活習慣の改善を試みる政策やプログラムを実施する際には、親から子への働きかけ（会話の頻度）を増やすような試みを行うことが効果的であることを本研究の示唆として提示したい。

文献

- ベネッセ教育総合研究所(2008)「第3回子育て生活基本調査(幼児版)」
- ベネッセ教育研究開発センター(2005)「第3回幼児の生活アンケート」
- Coleman, J.S.(1988).“Social capital in the creation of human capital” American Journal of Sociology, 94, pp.95-120.(=2006, 金光淳「人的資本の形成における社会関係資本」野沢慎司・編・翻訳『リーディングスネットワーク論』勁草書房)
- Coleman, J. S., & Coleman, J. S. (1994). Foundations of social theory. Harvard university press(=2004,久慈利武監訳『社会理論の基礎<上>』青木書店, 2006,久慈利武監訳『社会理論の基礎<下>』青木書店)
- 国立政策研究所(2003)「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査」
- 厚生労働省(2005)「平成17年 国民健康・栄養調査結果の概要」
- 文部科学省(2005)「義務教育に関する意識調査」